

地域素材を活用した中学校英語授業の実際

服 部 吉 彦¹⁾

Integrating the Subject of Residential Areas In Junior High School English Program

Yoshihiko HATTORI

小学校の外国語活動は、2011年に小学校5年生から必修となり取り組まれてきた。また、それに先立ち、1992年公立小学校において、研究開発が始まり、私は、1994年岐阜県本巣郡穂積町立生津小学校（現瑞穂市立生津小学校）において「小学校における外国語学習の在り方」に関する研究開発が行われたとき、当時の穂積町教育委員会に所属し関わらせていただいた。生津小学校の先生方は、カリキュラムを作成する際に、身近な内容をもとにして児童が興味・関心を抱き、学ぶ意欲が持続できるように、そして、英語嫌いにならないように心を砕いてみえたことを覚えている。中学校の英語学習においても、系統的に学習すると共に、特に題材について、生徒が興味・関心を抱き、学ぶ意欲が持続するような教材の開発が必要であると考えてきた。

小学校5・6年生に文部科学省より、外国語活動教材“Hi, friends!”が配布され、それを活用した様々な英語活動が教師の創意工夫により行われてきている。その児童が、生徒となった中学校においては教科書を使った英語活動が行われているが、さらに、児童・生徒が住んでいるふるさと題材を活用した小中の連続性のある英語活動が児童・生徒の学ぶ意欲を持続し、高めていくことに効果があることを、「教科書題材＋地域素材を生かした題材」を活用した中学校授業の実際を小学校の学習活動における内容や方法との関連性から述べている。

キーワード：ふるさとの地域素材、小学校との連携、内容を重視した学びによる表現力の育成

1 はじめに

小学校の英語活動の研究開発が始まって、はや25年が過ぎようとしている。総合的な学習の時間が1998年に創設された。1996年7月の中央教育審議会において、「「生きる力」が全人的な力であるということ」を踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手立てを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」として総合的な学習の時間が提言されたわけである。岐阜県の各学校は、教科書のない中、「身近なところ」に「題材」を見付けて、各学校に合わせたカリキュラムを作り上げていったと覚えている。

その内容の一つが「国際理解教育」であり、英語という外国語を使った活動であったと認識している。いくつかの小学校では、学校の研究テーマを、総合的な学習の時間にもとめたり、さらに、国際理解教育の在り方に焦点化したテーマにしたりして取り組んできた。その際の参考になったのが、研究開発学校の取組であった。

その後岐阜県教育委員会では、英語活動の推進と充実のために、各教育事務所管内（岐阜県は、岐阜、西濃、美濃、可茂、東濃、飛騨）の6か所に拠点校を重点的に配置しながら、その研究実践を広めることに努めてきた。小学校5・6年生を担当した先生だけが、英語の授業をするのではなく、どの小

1) 教育学部子ども教育学科

学校の担任の先生も、英語の授業ができるようにということである。まさに、先生も児童と同様に、英語活動を通して英語に慣れ親しむ。そして、英語を好きになり、英語の授業に自信をもてるようにということである。

実際は、すべての先生方がそうなるには、多くの時間を要している。国語や算数等他の教科においても同じように、すべての先生が自信をもって授業を行えるように各市町村では教科等の研究会において年間数回授業提案等をしてその充実に努めている。

2020年から小学校5・6年生が外国語として教科化され、2018年から先行実施に向けて、具体的な指導案や教材内容が文部科学省から配布され始めている。そういった状況ではあるが、これまでの、小学校英語活動の題材内容を見たとき、多くの学校が身近な内容を会話の題材にし、スモールトーク（授業の最初に、今日の遊びや好きな果物等を話題として対話する活動）という学習方法でペアやグループでの学習形態を使って、5分程度の会話を毎回設定しながら、英語に慣れ親しむ取組が行われてきた中で、中学校においては、どのような取り組みが生徒を英語嫌いにせず、また、英語を学ぶ意欲の持続に効果があるかを考えてみる。

2 小中学校の授業における内容と方法の一貫性のある歩み

中学校には教科用図書（教科書）があり、言語材料を題材との関わりを考慮して系統的に学べるようになっていく。昨今は、題材シラバスであり、機能面を大切にシラバスになってきている。本校で何人かの学生と話をしていると、学生によって違いがあるが、三人称、過去など、文法事項を新しく学んでいく過程において、理解不足を招き、苦手意識から学ぶ意欲の持続が減じている傾向がみられる。文法事項等の正確さについては、学生本人もさらに学習をしなければならないと考えている者がおり、中には、小中学校時代の英語学習について述べてくる者もいる。しかし、文法事項の間違いよりも、相手に自分の考えや気持ちが通じることを意図した学びがさらに行われ、その過程において修正が行われていくことも意欲の持続にとって大切であることは、本校の1年生が言語による表現活動（コミュニ

ケーション英語）を学んでいる時の参加意欲からいえるのではないかと考える。

この様なことから、小学校での学習活動が、文法事項をも大切にしながら、英語嫌いをつくらないように、「慣れ親しむ」ことを大切にして取り組まれてきた学びを生かして、中学校においても、一貫性を保ちながら進めていくことが重要になると考える。その際には、小学校において行われてきた「聞く、話す」活動と共に、その活動の時に使われた身近な内容を話題として取り入れながら、正確さをも大切にした授業を構想していくとよいと考える。

A中学校に入学してくるC小学校における身近な内容を話題とした題材内容や学年ごとの配列は以下のようである。

（C小学校）

【5・6年生】

・自分たちの学校・住んでいる町・県の名所・名産品・自分のおすすめの場所等よさや魅力・長期休業中の計画・週末の様子・興味のある学習・部活動・つきたい職業の名前・国の名前等

【3・4年生】

・住んでいる町・県の名所やそのよさや魅力・教科・曜日・クリスマスにほしいもの・夏休みにいてみたいところ・県内の地名

【1・2年生】

・教室・住んでいる町・日本の季節・行事・教科・数字・月・曜日・ほしいもの・どんな3年生になりたいか

A中学校では、この題材配列を意識して、ふるさとに素材を求め、教科書題材や言語材料との関わりから、どの単元で自分たちの住んでいる地域であるふるさとの内容を題材として活用できるかを考えた主な内容が以下のことである。

（A中学校）

いくつかの教科書題材と関連して、

【1年生】

・自分たちが住んでいる町の紹介・住んでいる町の四季・イベント等のよさや魅力・名所・名産物

【2年生】

・My Dream Town・1年生でまとめたものに付け加えて、自分のお気に入りのポイントと理由

【3年生】

・おすすめのスポット

これらを題材とし、言語材料を加味して、正確さを大切に作り上げていくこととなる。正確さと述べたのは、小学校では、音声を中心にした学習のために、発音と綴りの関係や文構造等を正確に指導していくことが必要となると考えられるからである。そして、小学校で話題を中心して学んできた話題シラバスを大切にしながら、中学校でその表現方法をより適切な言語材料を使いながら学んでいく等小中の役割をつなぐことにもなると考える。

上記した題材内容からもわかるように、小中一貫性のある内容を、地域素材に求め、学習活動を、年間数回の話し合いを持ち調整をしながら進めたり、互いの授業に TT 形式で参加したり、6年生の3学期には、中学校英語科の先生による授業を1時間程度したりする等して、児童・生徒の学ぶ意欲の持続が内容と方法の工夫で行われると考える。

3 授業の実践

授業の実践を次の(1)から(3)の内容で述べる。

(1) 地域素材の活用を図っている中学校で学んだ生徒の意識

(2) 英語のカリキュラムデザインと授業の実践

①小中の学習形態の連続性

②ふるさと題材を使った授業

(3) 地域の人材活用

・コミュニティ・スクールの制度を生かした地域の人材活用

(1) 地域素材の活用を図っている中学校で学んだ生徒の意識

地域素材を積極的に活用している A 中学校と教科書題材を中心にする B 中学校に、以下のようなアンケートをとって、傾向を見ようとした。

《アンケート内容》

①英語授業ではどんな活動が楽しいですか。

(・スモールトーク・ペア活動・グループ活動・先生主体の話・その他)

②活動するときどんな内容について行うことがよかったですか。

(・教科書の内容・教科書で学んだことを生かしてふるさとの内容を学ぶとき・ふるさとの内容・その他)

③外国の文化と日本の文化の違いや考え方の違いに疑問をもったり、調べたり、仲間と話し合っているうちにわかったりしたことはありますか。

④小学校と中学校の違うところや同じところだと思っていることを書いてください。

その他、A 中学校に入学してくる C 小学校等には、次の様なアンケートをとった。(一部のみ記載)

・英語の授業は楽しいですか。・英語を話すことは好きですか。・英語を聞くことは好きですか。・英語を読むことは好きですか。・英語を書くことは好きですか。・スモールトークは会話をする力をつけるのに役立ちますか。等といった内容である。

A、B二つの中学校の2年生(平成29年度)から抽出してアンケートをとった。

①と②の集計結果から考えてみる。

①の結果から考えられる小中連続した学習活動の効果

A 中学校の生徒は、「どんな活動が楽しいか」という問いには、「グループ活動」と回答した割合が約55%であった。理由は、「わからないところをみんなと考えて理解できて楽しい。みんなで交流できるのが楽しい」といったものであり、コミュニケーションをする楽しさを味わっている生徒が多いといえる。

また、ペア活動を選んだ子も約64%である。「英語のあいさつ、スモールトーク等の会話活動もペアで行うことが多く、理由も一緒に学べて楽しい」といったものであった。

そして、複数の選択を可としたこともあり、グループ活動を選んでいる生徒の中には、ペア活動や多くはペアで行うであろうスモールトークを選ぶ傾向にあり、理由も、「いろいろな考え方を知ることができる。会話が長く続くとうれしい。英語で話す機会が増えるから楽しい。確認しながら話を進めることができる」といったように述べている。B 中学校では、ペア活動、グループ活動とも40%強であった。

ペア活動やグループ活動、また、スモールトーク等、どんな学習形態や方法を使うかは、担当教師の

意図が入るとはいえ、生徒には、総じて好評であると考えてもよいと思う。

さて、スモールトークであるが、二つの学校は、それぞれ活動の意図をもって行っていた。

B中学校では、あいさつ活動と授業で学んだ文法事項や文構造等を意識した対話により習得をめざしたものであり、その際に身近な内容を話題としており、一人一人に確実な力をつけようと意図した活動となっている。

A中学校では、あいさつと共に、前回学習した教科書題材についての会話、ふるさとを話題に取り入れる等機能面に目をとめ、ゲーム形式で行う等工夫されていた。このA中学校は、ふるさと題材を授業の中に組み入れることにより、生徒に英語を使う喜びや意欲の持続を願っていた。

このA中学校に入学してくるC小学校においてもスモールトークが行われておりその内容は以下のようである。

【小学校 5年生の例】

- 4月 あいさつ、好きな食べ物、好きなスポーツ
- 5月 好きな色、好きな給食、好きな動物
- 6月 好きなキャラクターとその理由、好きなテレビ番組とその理由、好きな季節とその理由、好きな月とその理由
- 7月 野外学習の思い出
- 9月 夏休みの思い出、運動会の思い出
- 10月 日本の好きなところとその理由、自分の学んでいる学校の好きなところとその理由、自分の住んでいる町の好きなところとその理由
- 11月 好きな国とその理由、国あてゲーム、キャラクターあてゲーム
- 1・2月 冬休みの思い出、好きな教科とその理由
- 3月 将来したいこととその理由

そして、A中学校のスモールトークの内容は以下のようである。

【中学校】

・あいさつ・自己紹介・一日の生活・岐阜市の知っているところの紹介・出身小学校について・夏休みの生活・週末の生活・好きな食べ物やスポーツ・教科書題材からの発展的な内容等

その他に、特に、発達段階に即して自分の意見を伝え合う機会として What do you think about～? 等が盛り込まれたトピックが考えられている。そして、トピックを考えるときには、英語係と担当者が相談をして決めていく等学ぶ意欲につながる工夫がされている。

A中学校に入学をしてくるC小学校では、ペア活動として話す機会の多いスモールトークを毎時間10分程度3年生から6年生で年間35時間の中で行ってきている。現在の6年生（平成29年度）はスモールトーク等で英語を話すことが「好き」と回答している児童は約58%、「どちらかというと好き」も含めると90%強である。スモールトークは話をする力をつけるのに「役立つ」と回答している児童は70%であり、「どちらかというと役立つ」も含めると100%になっている。この回答は前述した5年生の例のように身近なことを内容として積み重ねてきていることもあると思われるが、5年生の時よりも向上している。

中学校においても、この活動は継続され、上記のような内容で位置づけられている。1年生（平成29年度）において、スモールトーク等英語を話すことが「好き」と回答した生徒は約40%、「どちらかといえば好き」も含めると約76%である。スモールトークは会話をする力をつけるのに「役立つ」と回答した生徒は約57%、「どちらかというと役立つ」も含めると90%弱となっている。

スモールトークの時間は、中学校においても10分程度であるが、会話が継続していく様子や生徒の表情をみるにつけ、小中が連携して、活動を授業の中に位置づけたり、話題の内容を確認したりして、協働して活動を行っていくことが学ぶ意欲や持続につながっていくと思われる。「どんな活動が楽しいか」という聞き方では、この1年生では、「ペア活動とスモールトーク」を60%強があげている。理由は、「みんなで話せるから。みんなとやる活動が楽しい。教え合いができるから。ペアの人の意見を聞くのがよい。表現の幅を広げることができる。習ったことを使って自由に話すことができる」等と述べている。総じて英語学習に意欲を感じているととらえられる。

B中学校は、スモールトーク等のペア活動が楽しいと感じている率は40%強で、前述したような意図をもってペア活動等が行われている。さらに、B中

学校では、英語の4技能の力を伸ばし、やる気を高めるために、授業内での以下のような工夫が行われている。4技能について、「キーワードをつかむ活動、自分の体験や思いをスピーチにする活動、教科書の英文をまとめて話す活動、教科書の本文を要約する活動、テーマにそって英文を書く活動」といったことである。技能項目によるが生徒の74.1%～95.5%が授業の工夫により英語の力の伸びとやる気のたかまりを感じている。生徒の学ぶ意欲の向上につながる授業改善が大切である。(平成29年度岐阜市総合教育会議提供資料より)

②の結果から考えられるふるさとに地域素材を求める効果

「活動するとき、どんな内容で行うことがよかったですか」という問いに対して、「教科書の内容についての活動」とこたえている生徒は、B中学校で約65%、A中学校においては約67%である。二つの中学校の違いとして表れてきたことは、「教科書で学んだことを生かしてふるさとの内容を学ぶこと。ふるさとの内容」を選んだ率はB中学校が約24%、A中学校が約49%であったことである。複数回答をした生徒もいることからこの率になっているが、理由は、「教科書以外の英語が使える。教科書を理解しふるさとを学べる。外国人に会った時にこたえることができる。教科書を生かして自分の考えを書く達成感がある。いろいろなことを活用して楽しくできる。今まで学んできたことをつなげ自分の能力を確かめることができる。身近につなげることができる。将来役に立つ英語でためになる。自分たちの育った場所のよさを英語で言える」といったことを述べている。「教科書がよい」とこたえている子の中には、「教科書は、みやすくわかりやすい」「基本がわかる」「テストにでるから」「理解できたときうれしい」「新たな文法が学べる」等といった理由をあげている。

教科書題材をしっかりと行い、それを活用してふるさとについての題材を使って授業を構成していくことも、子どもの学ぶ意識を高めていくことにつながるのではないかと考えられる。

A中学校では、約49%の生徒がよかったと回答をしているが、これは、担当教師が、教科書題材の発展として、自分の住んでいる地域に教材づくりの視

点を求めて、話したり、書いたりする等の表現力の育成をテーマにして、取り組んでいるからと考えられる。この学校が取り組んだ教科書題材にプラスした内容例は、前述したように、

【1年生】

・自分たちが住んでいる町の紹介・住んでいる町の四季・イベント等のよさや魅力・名所・名産物

【2年生】

・My Dream Town・1年生でまとめたものに付け加えて、自分のお気に入りのポイントと理由

【3年生】

・おすすめのスポット

であるが、これらは、教科書で学んだ題材や言語材料と関連して使われた地域素材である。

(2)「授業の実践」でも述べるが、教科書のいくつかの単元で、前述した内容に加えて、新しい地域素材を使った授業が生み出されている。

ここで、二つの中学校に「教科書の内容について活動するのがよかった」を選んだ生徒の率の違いはあまりなかったが、「教科書で学んだことを生かしてふるさとの内容を学ぶこと。ふるさとの内容を学ぶこと」の選択で違いがでたことについて考えてみる。

それは、カリキュラムの構成にある。

A中学校は、中学校において総合的な学習の時間に行ってきたふるさとについての学習内容と小学校の英語活動で行ってきた学習活動での内容とを生かして、中学校の英語授業に取り入れるカリキュラムの構成を行っている。

B中学校は、教科書題材でカリキュラムの構成をおこなっている。B中学校に入学してくる二つの小学校における英語活動の方法、たとえば、ペア活動などは、連携を図ってきているが、ふるさとに素材を求めた内容についての位置づけは多くない。このことが、生徒が活動をするときによかった内容を選択する基準の一つとなっていると考える。

では、A中学校では、どんなふるさとを素材とした学習をしたのか、ここでは、総合的な学習の時間でのカリキュラムの概要を1年生(平成28年度)の例で示す。

この学年は、「ふるさとを識る」というテーマで、学級ごとにふるさとについて、特色をもった総合的

な学習の時間を行った。

5クラスあるので、簡単に述べていく。

1年1組：ESDを意図して特に環境教育について、4月には、外来生物に着目して、近くを流れている天神川や長良川について調査をし、地域の竹林を保全している団体や鵜匠さんに話を聞く機会を持った。

1年2組：学んだことを美術の時間で学習した内容や方法を生かしてフラッグアートにした。

1年3組：ふるさとの自慢を探し、市の歴史まちづくり課の人を招くなどして長良マップを完成していった。

1年4組：防災に着目して、市の防災課から話を聞く等して、減災を考え避難所宿泊体験等を計画した。

1年5組：伝統文化に着目して、長良地域の句碑を巡り絵本づくりをする等を通して、紙芝居の形式で小学生に説明し連携を図った。

年間を通して、生徒に自分が住んでいるふるさについてさらに興味・関心と具体的な活動ができるように、5月には市の水防演習に参加し、土嚢訓練を地域の水防団の人に指導を受けたり、「長良と水害」と題して伊勢湾台風のころの長良についての講話を地域の人から聞いたりする等、地域のことを深く知り、考えるという年間のカリキュラムが作成された。11月には、地域や保護者に、取組のまとめを聞いてもらう機会をもち、3年間のふるさと学習の見通しをもったのである。

これらの内容の構成は、生徒の学習ニーズを把握すると、「自然資源、伝統文化資源、経済産業資源、人的資源」のどれをとっても、認知度との比較から、「知らないので、知りたい」「知っているがもっと知りたい」といった学ぶ意欲を大切にして構成されたものである。

たとえば、中学校3年生の場合、「経済産業資源」の認知度は45.6%であるが、学習ニーズは90.2%であり、子どもたちの学習意欲に結びついていると考える。「伝統文化資源」は、その認知度は85.9%であり、学習ニーズは94.1%である。(平成28年度東長良中学校区ふるさと学習推進協議会より)

このように生徒の学習ニーズをも考えながら、1年生から段階的に、ふるさとを題材とする各教科でのカリキュラムの作成が必要であると考え、総合的な学習の時間では、1年生は「ふるさとを識る」、2年生は「ふるさとから学ぶ」、3年生は「ふるさとで考える」というテーマを設定してカリキュラムの構成を考え、各教科では、ふるさとを素材とした学習のできる単元を洗い出して、カリキュラムを作成し、汎用的な資質・能力が育成できるように考えた。総合的な学習の時間での学びと教科での学びを横断的・総合的に行うことになり、生徒の学ぶ意識を、理科は理科、社会は社会、英語は英語ではなく、各教科を横断的に考えることができるようになり、学びとは、総合的に考えることが大切であるという生徒の意識の変容にもなると考えた。各教科で学んだことを総合的に行うというよりも、総合的な学習の時間で学んだ過程において、課題となったことを、さらに専門的に教科の学習でその課題を解決していく。そして、適正な解を見出していく学び方を身に付けていくことにもなると考えた。

自分の学ぶ方法や内容が役に立つと感じていれば、学ぶ意識は毎回の授業時間で途切れることなく、連続し学ぶ意欲につながるのではないかといえる。

このA中学校の1年生(平成28年度)は、「総合的な学習の時間は将来社会に出たとき役に立つと思いますか」という問いに、87.3%が「あてはまる、どちらかといえばあてはまる」と答えている。ちなみに全国の中学3年生は72.8%である。(平成28年度)また、このA中学校の1年生の総合的な学習の時間とかかわらせた理科の授業を学んだ生徒は、「学習活動の内容を保護者等他の人に話したいと思いましたか」といった問いに、「強くそう思う、そう思う」が89%であった。

(2) 英語のカリキュラムデザインと授業の実践

①小中の学習形態の連続性

②ふるさと題材を使った授業

次に、英語のカリキュラムの構成と授業の実践について述べる。

A中学校では、知識・技能を活用するための指導・援助として、「同じ言語材料を繰り返し活用する場を設定した学習計画、校区の小学校と連携した話題別到達目標の作成と活用、地域素材の活用、自分の考

えや気持ちを表現できるようにするための retelling の場の設定」として、年間を通じてどの学年においても授業を行っている。ここからは「学ぶ内容と方法の連続性」に視点もち、授業の組み方について考えてみる。

①小中の学習内容と方法の連続性

前述したように、授業のはじめの10分間程度でスモールトークを行うのであるが、その際には、内容を小学校との連携を図ることにより生徒に学びの連続性を持たせることである。生徒は、小学校での学びが中学校でも生かされることで、特に1年生では、安心して授業にのぞむことができることとなる。また、話題を、自分の好きなことや昨日の生活等小学校でも行ってきたことを取り入れることにより、二つの小学校で学んできたことを生かして話すことができる。1年生のあるクラスでは50%弱の生徒がスモールトークを楽しいと述べている。理由は、「表現の幅を広げたり、ペアの人のことを知ったりできる」等その楽しい理由を書いている。生徒は小学校と同じ活動の一つとしてスモールトークをあげていることから、この活動は、小学校での英語活動と同様に中学校の授業の最初の活動として定着している。

②ふるさと題材を使った授業

②のⅠ 自分が住んでいるふるさとの内容を題材に取り入れた2年生の授業

教科書題材 L5 My Dream を使って、Let's make a speech about "My dream and my dream town!" と単元名をつけて行われた授業について述べる。

単元のカリキュラム構成は、全14時間であり、教科書題材に登場してくる久美の将来の夢について、文章の構成に着目しながら読み取り、retelling の手法で久美のスピーチでわかったことを説明し伝える学習を6時間行う。その後、My Dream で3段論法を用いて、理由や経験など表現方法を4時間学ぶ。そして、単元の終末の4時間を使って、

- ①「岐阜の町の自慢できるところを提案しよう」
- ②「『作りたい町』の理由と具体的にしたいことを仲間に提案しよう」
- ③④「『魅力ある岐阜の町』を提案し交流しよう」といった学習課題をもつように構成されている。

教科書で学んだことを生かして、ふるさとの内容を題材にして表現力の育成をする計画となっている。ここでは、“My dream and my dream town” を話題として、なりたい自分とさらに魅力ある町にすることを提案する内容となっている。

(平成27年度A中学校 研究紀要 No.28より)

「自分が住んでいる町」については、小学校5年生の10月の英語の時間に「自分が住んでいる町の好きなところとその理由」といった学習活動を行ってきており、総合的な学習の時間にも、5年生までに「鵜飼いを世界遺産に」「僕らを守る金華山」や「長良川、天神川、水田、竹林」など、身近な自然、歴史、文化等を学んできている。また、社会科や理科等他の教科においても、身近なところに素材を見つけた授業が積み重ねられてきている。

担当教師は、その題材が、総合的な学習の時間や他の教科でどのように扱われているのかを知り、かかわったりつなげたりして授業を構成することでより生徒の学びが深まるように仕組むことができる。

私は、こういったさまざまな関連のある事柄をかかわらせつなげる構想力が、英語の授業を生徒にとって楽しく、また、20年後を担う生徒のために必要な「自らの住んでいる地域をよく知り、課題を見付け、解決していく力をつけ、一住民として生活改善やよりよく生活を営む力」を身に付けていくことになると考えている。「ふるさとに愛着と誇りを」と言われるが、そのためには、地域の住民から話を聞いて感想を持つと共に、「自分はどのような役割を担うのか」を考え、歩みを具体的に学習活動の中でのしたいと思う。

この授業は、小中の連携が方法と内容とにある。ここに3つあげる。

1つ目は、スモールトークである。

あいさつをはじめとして、昨日の生活、自分の住んでいるところで好きなところ等基本的には、ペアで行う。これは、小学校においても、授業のはじめに前述した様な内容で、繰り返し行っていることである。小学校との違いは、学んだ言語材料を意識して活用することであり、自分の気持ちや相手の気持ち、考えに理由を付け加えて述べる等、対話の仕方や内容が往復だけでなく、長く続き深まっていくことである。

2つ目は、考えを深めていく過程である。

「魅力ある岐阜市にするために」といった、小学校では、「好きなところとその理由」が「作りたい町とその理由」そして、「そのためにしたいこと」とある課題に対して、「自分の考え」「理由」「自分のすること」と町づくりへの貢献にまで考えを深めていることである。

3つ目は、学習形態（小集団学習）である。

英語の学習においては、ペア活動が多く用いられるが、この授業においては、小集団学習を毎回行い、生徒同士が4人という小集団で、創りあげる喜びを味わいながら学んでいったことである。小・中学校では、学習集団づくりという側面も担う小集団学習を課題解決のための話し合いや練習等英語に限らず社会や理科等他の教科においても活用することが互いを大切にし関係を深めていくためにも重要である。

この授業においては4人で、

作りたい町：I want to make a good city for old people.

理由：Because there are many old people in Gifu, but it's hard for them to live.

どうしたいか：So I want to put many slopes.

といった内容についてカードを使って練習しあう。その際に、生徒たちは、一人一人が確かに表現をすることができるように、アドバイスをしたり、励ましたり、Good! 等と評価をし合って互いを磨きあうのである。

単元の終末には、ある生徒は次のように自分の考えや行動しようとする内容を入れた文を作った。

I hope many people know about Gifu. So I'll make an effort to tell you. This is Kawaramachi. It is near Nagara river. Kawaramachi has Minatomachi, Tamaicho and Motohamamachi. There are many stores. Many people visit there. We can experience there. For example, first, we can eat Wakaayu. When I was there, I ate them. It was very very delicious. Second, we can make and buy Gifuuchiwa. I think it is hard to make it. I think the number of stores in Kawaramachi is decreasing. Do you know it? [sic] So I'm very sad. Because when I was seven years old, I went there with my grandmother. It was very very good place. I hope the stores are increasing in

Kawaramachi. So I want to make an active city. I'm going to tell people about many good places. I want to make a poster in Kawaramachi. I like Gifu.

このような授業の構成ができるには、英語授業はもちろんのこと、総合的な学習の時間や、社会や理科等の他の教科の授業においても、「自分の考え」「理由」「自分は どうしたいのか、するのか」等自分の意見や考えを確かなものにして交流し、耕す機会を継続的に持つことが必要であると考ええる。

②のⅡ 地域の民話を題材に取り入れた2年生の授業

なぜ、この担当教師は地域の民話を題材として使ったのであろうか。

そのことについて次のように述べている。

「子どもの頃に住んでいた町には、いたるところに祠があった。幼いころ前を通るたびに手を合わせたり、花を供えたりした。祖母は、「ここはね・・・」と話を聞かせてくれた。祖母に手を引かれ、町の中を散歩しながら話を聞くことで、自分の町について愛着を感じた。今でも、その場所へ行くと懐かしい思い出でいっぱいになる。」そして、「今後国際社会に生きる生徒たちにとって、自分自身や自分の住む町(国)について、情報を正確に伝え、異文化の人々と互いの違いを理解しあうことが大切になってくる。本単元では、教科書の題材を通して、聞き手に配慮して、わかりやすく物語を伝える方法について学び、それらを活用してふるさと長良に伝わる民話を伝える時間を設定する」と述べていた。

将来を担う生徒の育成への情熱が、感じられると共に、授業をデザインする構想力により生徒のモチベーションの高揚と英語を学ぶ意欲の持続が生まれると思う。

この学習を終えた生徒は、「ふるさとを英語で説明できることはよいと思うしもっとやってみたい」といった感想を持っていた。

ふるさとへの興味・関心を持続する生徒の意識を高めた単元のカリキュラムは、次のように全11時間で構成されている。教科書題材はL2 Peter Rabbitであり、本単元の文法事項は過去形である。こういったこととかわらせながら、単元名を“Tell the

story of Nagara!”とし、「長良に伝わる民話として（話題）、物語のあらすじ（内容）を、過去形を用いて（言語材料）、絵をさし示したり、抑揚をつけて伝えたい内容の語句を強くしたりして（表現方法）、一枚の絵につき2文程度で話すことができる」といったねらいとした。

単元の大まかな活動は次のようである。

- ・1時間目から8時間目
The Tale of Peter Rabbit のあらすじを説明できるように学ぶ。
- ・9時間目
長良の民話である「おくわ様」の話を出来事の順番を大切に読み取る。
- ・10時間目
絵カードにして、Peter Rabbit のときの説明で行った方法を活用してあらすじを伝える。
- ・11時間目
紙芝居にして、小学校の児童に伝えたいといった目標を持たせて取り組む。

長良の地に生まれ育った生徒たちは、「おくわ様」の話を興味深く読み取り、まとめた内容を小学校の子たちに紙芝居として説明できることを楽しみにしていた。

（平成29年5月26日 A中学校全校研究会英語科学習活動案より）

教科書題材とふるさとにおける地域素材を組み合わせることは、可能だと思われる。たとえば、“Clean up campaign” についての題材であれば、中学校で地域清掃が行われていれば具体的に生徒はイメージができその内容や方法を述べるができる。“Four seasons” についての題材であれば、自分の住んでいるふるさとの四季とかかわらせることができる。“Day-at-work program” についてであれば、中学校で行われている職場体験プログラムとつなげて考えることができる。“Environmental problem” であれば、自分の住んでいる地域の環境について思いをめぐらすことができる。

前述したように「教科書で学んだことを生かしてふるさとの内容を学ぶことがよい」と思っている理由は、「教科書は基本的なことを学ぶ。ふるさとに生かして自分で考えることができる。教科書以外の英語が使える。教科書を理解しふるさとを学べる。

教科書で学んだことをふるさと紹介に生かせるとうれしい。いろいろな活用をして楽しくできる。今まで学んだことをつなげ、自分の能力を確かめることができる」等といったことをあげている。このようなことから、文構造や語句等の言語材料を重視して系統的に学習をしていくことが大切ではあるが、その活用場面である話題や題材等の内容のシラバスを、子どもが住んでいる身近なふるさとに目を止めていくことで、活用の喜びを味わいもっとやってみようというモチベーションになっていくと考えられる。

今回、ふるさとに地域素材をもとめて、中学校という題材が決められている教科書を生かしてふるさと題材を取り上げ、3年間を通して学んでいく実践の一部を紹介し、その効果を考えてみた。

ふるさとに地域素材を求める際に、力となっていたのが、地域の人たちである。岐阜市の小中学校はコミュニティ・スクールとして歩んでいることから多くの地域の人や保護者の人が支援をしている。今回取り上げたA中学校で、教材にできるふるさとの資源のいくつかを記述する。

「項目」「支援者」「領域」の順に記す。

・天神川	岐阜大学・科学部	環境
・長良川ワイン	地域	理科
・山川醸造	地域	理科・社会・美術
・鶯飼いミュージアム	学芸員	伝統
・防災ジオラマ	東京ジオラマ	防災・社会・理科
・百々峰反射板	中部電力	理科
・川の微生物	NPO	理科
・鶯飼い	鶯匠	伝統・英語
・長良の民話	コンベンション協会	伝統・英語
・デレーケ、水防	地域・水防団	防災・理科
・地下水	岐阜大学	環境・理科
・水害	防災課	防災・総合
・長良の歴史	郷土クラブ	歴史・社会
・鶯飼い大橋	管理課	理科・美術

（平成28年度 小中一貫教育推進事業冊子より）

ここにあげたふるさとの資源は、総合的な学習の時間や理科等教科での題材として取り扱うことができるものである。

英語科での授業の実際には、「魅力ある岐阜の町の提案」「民話 おくわ様の紙芝居」の例をあげた。

表現力をつけるためには、「ALT に鵜飼いを紹介しよう」とか「岐阜大仏について説明しよう」といった「事実を述べる」ことから「自分の考えや視点をもって」自己表現していく力をつける段階が考えられ、スピーチ、討論等の実際的な場面で言語使用をすることが必要となってくると考えられる。教科書を使って4技能をバランスよく計画的・系統的に行うように計画されている、『聞くこと』『話すこと』『読むこと』『書くこと』の言語活動が、「買い物をして、インタビューをして、空港で、手紙を書こう、メールで、電話で、道案内、ホームページ・・・」といったさまざまな場面で言語活動が仕組まれていることから、機能を重視した傾向がある中で、「ふるさとに題材」を求めることは、自分の考えを確かにもち、英語を使って対話したり、説明したり、考えを述べ合ったりすることにより表現する幅が広がると共に人間関係が深まっていくことになると思う。実際、新しい ALT が中学校に赴任した時、生徒はその ALT に何を話しかけていくのであろうか。「出身地、その町の様子、何が好きか、日本にどのくらいいるのか、来たことが過去にあるのか。どのあたりに住んでいるのか。好きな食べ物、好きなスポーツ・・・」こういった内容において、ALT が生徒に生徒の住んでいる町について、問うてきたとき、その説明のための、既存の知識や英語の語彙、使用する文等、事前に学ぶ機会があるのとないのとは、人間関係の深まりは違うのではないかと思う。

(3) コミュニティ・スクールの制度を生かした地域の人材活用

英語の授業では、多くの場合 ALT の存在がある。岐阜市では、すべての中学校に ALT が常駐している。中学校区にある小学校には、その中学校に常駐している ALT が通っている。こうしたことも、英語における小中一貫を意識したものとなっている。

A と B 中学校は、コミュニティ・スクールとしての歩みを行っている。授業を進める際には、専門性を生かして、地域や企業の人に参加をしてもらうことがある。英語の授業では、ALT が専門性を発揮して TT 形式で行うことが多く、地域の人材の活用は、現在多くはないと思われる。理科や社会、そして総合的な学習の時間では行われているところがある。

たとえば、A 中学校で理科の時間に次のような授業があった。総合的な学習の時間とのかかわりも含めて述べる。

総合的な学習の時間で、「鵜飼い」をテーマに班での話し合いが行われた。「鵜飼い」をもっと知りたいということであった。総合的な学習の時間に、鵜匠さんの家に行き、鵜の世話や扱い方、鵜飼いの時の苦労や喜び等を聞きに行った。長良川には、鵜飼い大橋という橋が架かっている。この橋に注目した班は、次のような疑問をもった。「長良橋や忠節橋と違って、鵜飼い大橋はなぜ橋脚が少ないのだろうか。」鵜飼い大橋と名前がついているように、大きな主塔があり、それにワイヤーが何本か張られており、力を保つことにより、橋脚が少なく済むのであるが、橋脚を川の流れの中に作ってしまうとアユの生育環境が変化をし、鵜飼いに影響があるということからも橋脚の少ない橋となっているということ、追究したのである。それは、理科でいうと、合力と分力の考えにもなるということとなり、理科の授業で、課題を「なぜ鵜飼い大橋の主塔が高いのか」として、課題を解決する授業が行われたのである。その際には、地域人材として、鵜飼い大橋を管理している専門家に来校してもらい班で課題を解決していく実験をする様子をみてもらった後、授業の最後に管理者としての専門的な話をする時間が設定されたのである。

生徒は、「理科の授業で自分たちの疑問から課題が創られ、より専門性の高い人からの話を聞けることになったこと。身近なところに、理科で学習している科学的事実があるということ。理科の時間のおもしろさを感じて、さらに理科をやってみたいと思う生徒が増えたこと」等、担当教師の授業の仕組み方の工夫もあったが、総合的な学習の時間から疑問に思ったことをより専門的に教科の学習で解決していくプロセスを学んだことで、総合的に物事を考えていく喜びを味わい、学ぶ意欲が高まったと言える。

現在、コミュニティ・スクールの制度を生かして、岐阜市のある小学校では、年間を通じて、英語の授業の際には、市から派遣されてくる ALT や EF (English Friend で英語が話せる外国人) 以外に、地域の英語に堪能な人材をゲストにして、TT 形式で活用をしているところがある。地域の方は、無償のボランティアであり、自分の住んでいる地域の子

ども達を育てる時間を共にすることに喜びを感じ、貢献することによりいきがいを見出している。地域や保護者の方が、自分の得意なことで、また、専門的なことで、学校の教育活動に対して貢献できる喜びは、生きる糧ともなりえる。これは、児童生徒も同様である。多くの大人に日常から接することとなり、学校・家庭・地域それぞれに居場所があり、協力や貢献する喜びを感じていくことになると思う。ここでは、詳しくは述べないが、全国学力学習状況調査のアンケート項目で、「地域や社会で起こっている問題や出来事への関心」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えること」等に、よい変化が表れ、義務教育の目標の一つである、社会形成への参加・参画する態度の育成に寄与することとなっていると考える。

4 ま と め

今回、取り上げた地域素材を活用した英語授業は、学習指導要領において育成すべき資質・能力としてあげられる「何ができるか」「どのように使うのか」「どのように社会や世界と関わって、よりよい人生を送るのか」といった取組につながると考える。

各教科が行っている教科学習は、生徒の興味・関心を持続し、より専門的なものの見方や考え方を鍛えていく学習となってきたと思うが、各学校の位置するふるさとには、各教科に関連のある多くの学習素材があり、担当教師がその素材を自分の専門の教科との関連を図りながら、生徒が総合的に思いを巡らせ、自分の獲得している知識や技能をもとに考えると共に、その過程において新しく知識や技能を身に付けていくことができるものであり、先人の方たちが創り上げてこられた多くの教材も活用して授業を構想したいと思う。そして、総合的な学習の時間の目標の中にある資質・能力として、「課題に関わる概念形成」や「実社会や実生活の中から問いを見出す」「積極的に社会に参画しようとする態度を養う」等を育成することにもなると考える。

中学校の学習指導要領の外国語の目標にある資質・能力として、「実際のコミュニケーションにお

いて活用できる技能を身に付ける」「目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、・・・表現したり伝え合ったりすることができる力を養う」などの育成に寄与するためには、総合的な学習の時間と全教科の学習活動における関連性を自分の住んでいる町を基軸にしてカリキュラムの構成をすることが、そして、小中の内容面での一貫性を図る連携を自分が住んでいる町「ふるさと」の視点で教育活動を生徒と共に創り上げていくことが学ぶ意欲の持続につながり、学校という「学び」を創造するコミュニティに、地域も保護者もつどえる心のふるさととなると考える。

引用文献

- 岐阜市教育委員会(2017)、平成29年度 第1回岐阜市総合教育会議 提供資料
- 岐阜市立岐阜小学校(2013)、岐阜小学校コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)公表会
- 岐阜市立東長良中学校(2015)、研究紀要 No.28
- 岐阜市立東長良中学校(2016)、研究紀要 No.29
- 岐阜市立東長良中学校(2017)、平成29年度 全校研究会英語科学習活動案
- 東長良中学校区ふるさと学習推進協議会(2017)、平成28・29年度 岐阜市教育委員会指定 平成28年度 小中一貫教育推進事業
- 松川禮子(1997)、小学校に英語がやってきた!、アブリコット
- 文部科学省(2008)、小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間
- 文部科学省(2017)、小学校学習指導要領 外国語
- 文部科学省(2017)、小学校学習指導要領 総合的な学習の時間
- 吉田研作(2017)、小学校英語教科化への対応と実践プラン、教育開発研究所
- アンケート等への協力者
- 鹿嶋成子、澤島雅和、堀部幸嗣、木股純子
武部八重子、山口美穂、樋田光代、堀貴美
鈴木大介